

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	シュメール語のBilingual Textsの話（第7回広大言語学会講演要旨）〈論文〉
Auther(s)	吉川, 守
Citation	広大言語 , 11 : 1 - 3
Issue Date	1971-12-06
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046359
Right	
Relation	



論 文

シュメール語の Bilingual Texts の話 (第7回応大言語学会講演要旨)

吉 川 守

メソポタミア及びその周辺地域から出土した楔形文字粘土板の総数は数十万に達するといわれますし、将来さらにその出土数が増加することは当然予測されるわけです。従って、独力でシュメール語資料全般にわたる周到な研究を行うことがもはや不可能になってきたわけで、研究目的に従って、その攻究対象を可能な範囲内に限定し、出来るだけ Exhaustive な研究を志向することがむしろ望まれるわけです。例えば、シュメール語資料は、Linguistic な立場から、シュメール人自身によって書かれたシュメール語資料と、シュメール人以外の民族、例えばバビロ²人、アッシリア人などによって書かれたと考えられるシュメール語資料に類別することが出来ます。前者は、Falkenstein の名付けました Altsumerisch から Neusumerisch にわたる資料にはほぼ一致しますが、その記述は若干の例外を除いて、三人称を中心に展開されますので、シュメール語の全体像を再構するためには適切ではありません。しかしながら、例えば動詞接頭辞の研究の場合には、バビロ²人の手になる後期資料 (Nachsumerisch) をむしろ除外して考察することが望ましいと考えられます。

私が今日の話題として選びました Bilingual Texts も実は研究対象として、その様な限定的性格をもつものでして、一昨年、シカゴ大学オリент研究所の Staff として在外研究に従事している間に主に精力を傾倒した対象であります。その公刊されましたテキストはすでに膨大な数に達していますが、広義の Bilingual texts は、Lexical texts, Grammatical texts 及び勝義の Bilingual texts に分別することが出来ます。私のこれから話しますのは、この勝義の Bilingual texts であります。最近この種のテキストを二分しまして、Kanonisch (正典的) Nicht-Kanonisch (外典的) と区別することがありますが、言語学的に興味深いのは、むしろ前者の方であります。Canonical texts はその資料の性質上、色々の都市から様々の時期の写本 (Duplicates) が発見されています。例えば、G. A. Reisner, Sumerisch-Babylonische Hymnen nach Thoutafeln griechischer Zeit, Berlin (1896) に収められました泥章の典書き (Colophon) には、Alexander (A-lik-sa-dar.), Antiochus (An-Ti-u-uk-kusu), Arsaces (Ar-sa-ka), Demetrius (Di-mit-ri) などの名が見え、写本の新しさを示していますが、もちろんこれらのテキストには諸種の古い Duplicates が知られています。

Bilingual texts 全般についての言語学的研究といった論著はまだ殊んど見られないので

すが、私はオリエント研究所の図書館の中から次の2冊を見つけることが出来ました。

Heinrich Kroegel, Beiträge Zum ^{SPT} Sprachlichen
Verständnis der sumerisch-akkadischen
Beschwörungstexte, Berlin (1913)
Jerrold S. Cooper, Sumerian-Akkadian literary
Bilingualism, Chicago (1969).

いずれも Dissertation として提出されたもので、未出版のようです。Cooper 氏の論文は完備した図書館と良き指導者を得て、中々に Instructive な労作で、Cooper. 第5章が Linguistic phenomena に当てられています、その節分けは次の通りであります。

1. Akkadian grammatical and lexical interference - Sumerian.
2. Sumerian interference in Akkadian. in
3. Translation problems. n
4. Transmission problems.

この第1節では、~~_____~~ texts におけるシュメール語の特徴の問題に触れているのですが、当然後期 ^{Bilingual} テキストにも共通した複雑な問題を含んでいますので、簡単に紹介して ~~_____~~ ことにします。

シュメール語の定動詞は、普通には、その前に Infix, ~~_____~~, そして必要に応じてさらに Preformative が前接されるのですが、シュメール語に特徴的な Compound verb では、動詞 ~~_____~~ つねに ~~_____~~ 接される名詞 (的要素) があって、この名詞は Prefix 或いは Preformative に前置されるが、古(典)期シュメール語の通則なのです。ところがこの規則は Bilingual texts では、時に破られています。Cooper はその例として si~sa を挙げています。si は (指, 角) を意味する名詞, sa が (正しくする) などの意味をもつ動詞です。この動詞について氏は3つの Pattern を挙げています:

1. si Prefix-infix-sa (-suffix)
2. si Prefix-infix-si-sa (-suffix)
3. Prefix-infix-si-sa (-suffix)

このうち第1の例のみが Correct であって、他の Constructions はシュメール語文法に対する知識の不足に由来する誤りであるというように断じています。実は、私も同じ問題に気付きまして、「バビロニア人のシュメール語研究について(2)」(西南アジア研究, No. 9, 1962) という小論の中で同趣の見解を書いているのです。しかし最近、反省的によく考えて見ますと、シュメール語は大略2500年に及ぶ長い歴史を有していますし、しかもシュメール語の中で多数知られている Compound verb のうちこのようにいわば破則的な用例が ~~_____~~ られるのは si~sa のみに限られているのです。従って si~sa に欠られるこのような Fluctuation は、必ずしもバビロニア人による間違いと断定することは出来なくて、シュメール語にすでに内在していた変化が、この

よりな浮動性として現われていると考えられないこともないのです。

同じような解釈に於けるむつかしさは次の様な場合にも認められます。私は今、文学部紀要(大26巻～30巻)の中で、バビロニア人がMarû^uと呼びましたAspectを表わすために、シュメール語の動詞の中には、①語根の重複②Suffix-eの接辞③独自のMarû^u語根を使用する3つのグループがあることを指摘しようとしているのですが、後期シュメール語資料になりますと、この規則は必ずしも厳密には守られていないのです。ミュンヘン大学のEdgard教授が、私への私信の中で強調されるのも実はその点にあります。たとえば、重複形式の動詞が、動詞の重複と同時に接辞-eを~~併用~~している例があって、一見、私の提説に矛盾があるかのように見えるからです。申すまでもなくこのような不規則な用例は、AltsumerischからNeusumerischにわたるシュメール語テキストには全く在記されないのですから、その解釈が非常に重要なポイントになるわけです。私はどちらかといえば、この種の用例をやはりバビロニア人による誤謬と考えていたのですが、Bilingual textsを含めた後期資料についての知識が増すにつれて、むしろ、シュメール語自体の中に、重複形式から接辞形式へ、交替形式(Marû^uの表現に独自の語根を持つグループ)から接辞形式への移行が除々に進行していたのではないかと疑うようになってきています。

Journal of Cuneiform Studiesの最近号(Vol.23/4,1970)の中でJ.Kleinは“決定を行う”という意味のCompound Verb: $Ka - a^v - bar$ が、時に冗長的に $Ka - a^v - bar \sim bar$ として表現される例を指摘し、この種の冗長表現はPost-OB期のsuen神及びsamas^v神に対するBilingual hymnic prayer^sに特徴的であるけれども、同趣のAnomaliesはすでにOB期にも在記され、明らかにInferior s^orbalsnipに起因すると解釈しているのです。また最近Archiv Orientalni(Vol.37/4)にB.Hruska^vが発表いたしましたBilingualテキストの“*Inannas Erhöhung*”につきまして、M.Lombertが面白い書評を寄せています。(Orientalia,NS40/1)。Hruska^vは古典期のシュメール語の規則を出来るだけ厳密に適用してシュメール語文を~~そう~~とし、アッカド語文とシュメール語文とが一致しない場合は、アッカド語をInferior^oか~~或~~いは間違ったものとして扱っているが、このような態度が、Bilingual textsの研究では時に重大なミスを犯しやすいことを具体的に指摘しています。この指摘はたしかにSuggestiveでありまして、Bilingual textsに於ける伝承の問題は一元的に理解できない複雑な問題を含んでいるように思われます。

以上Bilingual textsに於けるシュメール語の問題について、その一斑を紹介して見たわけですが、言語の発展過程に異質な言語要素が直接的に関与した場合、その変容の理解は非常に困難であり、諸条件の周到な検討が必要であるように思われます。シュメール語はイン・ラルサ王朝期以後死語と化したと一応考えられていますが、この時期の死語化の過程をどのように促えるかということが今後色々な点で重要なポイントになりそうに思われます。